

---

# 犬猫裁判

加藤アガシ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

犬猫裁判

### 【Nコード】

N8419I

### 【作者名】

加藤アガシ

### 【あらすじ】

満月の夜、J青年は犬になった。そして、どこからともなく現れたフクロウに犬の街へと導かれる。絵本風な物語です。

## 第一話

満月の夜、J青年は犬になった。

彼がそのことに驚き、慌てていると一羽のフクロウがどこからともなく現れ、こう言った。

『ほーほー。』

貴殿は犬になったのだから、人間世界にはいられまい。

ゆえに、犬の街に行くのが正しい。

ほーほー。

私が案内してやろう。

ほーほー』

J青年はそれに従った。

それに従った。

フクロウは人間世界を抜け、憂いの森を抜け、犬の街へとJ青年を導いた。

その間、フクロウは余計なことは一切喋らなかった。

一切喋らなかつた。

そうして、J青年が犬の街の門をくぐるとフクロウはどこかに消えてしまった。

どこかに消えてしまった。

犬の街。

そこは人間世界のそれと何ら違わなかつた。

しっかりとした造りの家々があり、パン屋があり、教会があり、宿屋があつた。

ただ一つ、違っていたのは、街の『主』が犬であることだけだつた。

それだけだ。

「青年は、その光景に驚き、そこにいた犬に聞いた。

『君も昔は人間だったのかい？』

犬はそれに答える。

『人間？』

俺をあんなものと一緒にしないでくれ！

俺は生まれたときから、純粋なファラドだ！

もしかして、お前はクーロンなのか？』

『クーロン？』

「青年は聞き慣れない言葉に耳を疑った。

『昔、人間だった奴らのことだ。醜く、哀れな生命よ。奴らは、月に呪われた・・・』

そう言うと、犬は怒ってどこかへ行ってしまった。

「青年は自分が、犬が言ったクーロンであることに戸惑った。  
俺は一体どうしちゃまったっていうんだ？」

「青年は混乱する。」

混乱する。

『猫たちがくるぞー！ーッ！！』

突然、街の真ん中にある高い鐘塔から、街の外を見下ろしていた犬が、大声で叫んだ。

そして、その鐘を執拗に鳴らす。

ごんごんごん。

ごんごんごん。

『全員ならベーーーーッ!!!!』

今度は、J青年の近くにいた門番が叫んだ。

その瞬間、家々から、たくさんの犬たちが飛び出してきた。

飛び出してきた。

そして、J青年は感じ取る。

何かが始まる。

何かが始まる。

## 第二話

『さつさと隊列を組め！ノロノロしていると猫たちに笑われるぞ！  
！！並べ並べ！！！！』

門番の犬は、犬たちに怒号を飛ばす。

この状況に「青年がおろおろしていると、門番は「青年の頭を叩いた。」

『お前、何してる？さつさと並ばんか！？』

『ど、ど、どにに？』

「青年は呻きながら言っつ。

『何だ！？お前が今日の新入りか！？なら、あの片目の犬がいる所に並べ！』

門番の犬が指差した先には、確かに片目がつぶれた犬がいた。  
「青年はそこへ急いだ。」

『よし！並んだな！全員、敬礼！』

門番の犬の声を、皮きりに犬たちは、一斉に敬礼をした。

「青年もそれに倣う。」

それに倣う。

次の瞬間、トランペット、ティンパニ、フルートなどの楽器の音が街中に鳴り響く。

猫たちだ。

「青年は、再び目を疑った。」

たくさんの猫たちが楽器を演奏しながら、街へとやってきたのだ。

街へとやってきたのだ。

猫たちはしばらく踊りながら演奏をし、全ての猫が門をくぐると、先頭の猫が音楽を止めるよう、合図を送った。

音楽が止まると、先頭の猫は犬たちを見渡し、こう言った。

『……ゴホンッ。』

やあやあ、犬の皆さま方、毎度変わらず、お迎えどうも。

我らも、こう迎えられると、非常に満足満足。

音楽にも自然に熱が入ります。

今宵の月裁判も、きつと一層実りがあることでしょう。』

月裁判？  
何だそれは？

「青年はこれから始まるのであろう」「それ」に不安を抱いた。

『あの、月裁判って言うのは？』

「青年は、隣の片目の犬に聞いた。

『月をめぐる裁判じゃよ・・・』

『月をめぐるって・・・』

『話をするな！』

「青年たちの会話に気づいた門番が、彼らに怒号を飛ばした。

怒号を飛ばした。

そして、その声に驚いた犬と猫たちは全員、一斉に「青年のことを睨みつける。

全員、睨みつける。

『すみません』

「青年は視線に慄き、誤った。

そしてその時、「青年は、一匹のメス猫と目があう。

目があう。

猫の楽器隊の最後尾で、その猫だけは何も楽器を持っていなかったからだ。

メス猫は、「青年が自分を見ていることに気づくと、すぐに目を逸らした。

なぜだろう？

「青年は、なぜかそのメス猫に謎の『ぬくもり』を感じた。

『ぬくもり』を感じた。

『もしもし。』

『もしや、彼が今日来たクローンで?』

楽器隊の先頭の猫は、「青年を指差し、門番の犬にそう聞いた。どうやら、この猫が猫たちのリーダーのようである。」

『はい。今さっき、この街に来たばかりのようで・・・』

門番の犬がそう答えると、リーダーの猫は「青年を舐め回すように見つめ、続けた。」

『なるほど。これはこれは・・・』

『ええ、まあ、よろしい。』

『では、彼を重要参考人として、法廷へ連れて行ってください』

重要参考人?

「青年がこの状況を理解できないでいると、大きな犬が「青年のと

ころに来て言った。

『ついていい！』

そうして、「青年は強引に、その犬に連れていかれた。

連れていかれた。

### 第三話

犬の街の法廷。

そこは人間世界の法廷に比べ、うんと広がった。

うんと広がった。

街の犬たちの全員はもちろん、やってきた猫たちも全員参加できる  
広さだ。

何も分からないJ青年は、その法廷の真ん中に一人座らされた。

座らされた。

『・・・ゴホンッ。

では、始めましょうか。

第4498821回、月裁判を・・・』

猫のリーダーが言った。

『ああ。

始めるとしよう』

「青年をここまで連れてきた大きな犬が言った。

『まず、前回の裁判では、そちらが60%所有・・・、こちらが40%所有という結果でしたよね?』

猫のリーダーが顔をしかめて言った。

『ああ、そのとおりだ。

しかし、いつもどおり新月から満月までの短い間だけの話だ。その前の満月までは、そちらが70%だった』

大きな犬も顔をしかめて言った。

何の割合だろう?

犬と猫は、何の割合を決めているのだろうか?

「青年は、必死に状況を読もうと努めた。

『確かに総合的に見れば、我々、猫族の方が月の所有率、そしてその期間は長いですよ。』

ですが・・・、結果としてクーロン保有数、クーロン発生率は明らかに、あなた達、犬族のほうが多いときています。

なら、月を多く得るのは我々の方がふさわしい。違いますか？』

猫側の席に座っていた賢そうな猫が口をはさんだ。

そしてそれに対し、たくさんの猫たちが『うんうん』と頷いた。

クーロン？

確か、俺のように人間から犬になったヤツのことを指す言葉だったはずだ。

しかし、犬だけではなく、猫の方にも、昔は人間だったヤツがいるのだろうか？

そして、月の所有率？

月裁判とは、その名の通り、月の所有権を決める裁判なのだろうか？

」青年はすばやく頭を回転させた。

回転させた。

『うつむ、クーロン・・・。  
うつむ、おっしゃる通り。どういうわけか、我々、犬族の方がクーロンが多く発生する。  
しかし、それと、月の所有率は関係ないでしょう？』

大きい犬が言った。

『関係ない？』

大いに関係あるでしょうに！！

そもそも、月裁判はクーロンを等分に分けるためのもの・・・。

絶対的に、クーロン数の少ない我々には、それだけ月を所有する必要がある！！』

猫のリーダーは声を荒げて言った。

そして、犬猫両者のガヤ達も、一斉に声を荒げる。

場は騒然となった。

しかし、「J青年は未だに、よく分からない。

自分は何のためにここにいるのだろうか？

J青年が、そう思った時、猫のリーダーが言った。

『ふんッ！』

まあ・・・、よろしい。

では、今回もいつもどおり、重要参考人に話を聞こうじゃありません

んか？

それで、答えが分かる・・・。

おい！そのアナタ！

君は人間だった。そうですね？』

『・・・はい』

」青年はオドオドしながら答える。

答える。

『よろしい。では、人間だったころ、月をよく見ましたか？』

猫のリーダーは続けて問う。

『・・・いいえ』

」青年は答える。

『なるほど。じゃあ、罪を犯したことはありませんか？』

『・・・いいえ』

『嘘をつくなーッ!!!!!!!!!!』

「青年が答えた瞬間、その場に居合わせた全員がそう叫んだ。

全員がそう叫んだ。

しかし、「青年は本当に罪を犯したことはなかった。

犯したことはなかった。

『本当です。嘘はついてません!』

「青年は弁解する。

弁解する。

『ハツハツハ！まだ言いますか。』

「どうやら、今回のクーロンはとんだホラ吹きのようにですね?』

『つむむ・・・』

猫のリーダーが冷やかにそう言うと、大きい犬は口をつぐんだ。

何なんだ？

これは？何なんだ？

」青年はますます混乱する。

『確かに今回、我々、犬族の所に来たのはとんだクーロンのようだ・  
・。』

しかし、噂によると、今回はアナタ方の所にも来たらしいではない  
ですか？

クーロンが！』

大きい犬が言った。

その一言で犬側が盛り上がる。

『……おっしゃる通り。』

確かに、今回は私たちの所にもクーロンがやってきましたよ。  
呼びますか？』

『無論！』

猫のリーダーの問いに、大きな犬は即答する。

即答する。

そして、法廷に、猫側のクーロン、つまり、J青年と同じく、先ほどもまで人間だった猫が連れてこられた。

連れてこられた。

その猫を見るといなや、J青年は驚く。

なぜなら、その猫は、門の所で見た『ぬくもり』を感じたメス猫だったからだ。

メス猫は証言台に立つ。

J青年とすれ違う瞬間、目があつた。

目があつた。

やはり、彼女も昔は人間だったのだ。

## 第四話

証言台に立ったメス猫はおびえていた。

おびえていた。

当然だ。

彼女もまた、J青年と同様に先ほどまで人間だったものであり、いきなりこの場所に連れてこられたのに違いないのだ。

J青年は、自分と同じ立場に置かれたそのメス猫に好意を抱く。

好意を抱く。

『では、問う。』

君も昔は人間だった。違くないね？』

大きい犬が、メス猫に聞いた。

『・・・はい』

か細い声でメス猫はそう答える。

『君は自分がなぜ、猫になったのか分かるか？』

『・・・わかりません』

大きい犬の問いに、彼女はそう答える。

『大抵のクーロンは月の恩恵を受けていることに自覚がないんですよ』

猫のリーダーが口をはさむ。

『まったくけしからんな』

大きい犬はそう言う。

けしからんな。

「青年はなぜか、その言葉にムツとした。

本人にも理由が分からない漠然とした謎の『怒り』だ。それも圧倒的な。

しかし、「青年はその怒りをどうすることもできない。ただ見ているだけだ。

『もういいでしょう？』

クローン達はいつも通り、愚かなモノたちです。

今回は、両族ともにクローン一体ずつ・・・、それもまったくの欠如者。これ以上、聞く必要はないかと思いますが・・・？』

『うつむ・・・。では、最後に一つだけ質問しよう』

『どうぞ』

猫のリーダーが許可すると、大きな犬は一呼吸置き、メス猫に聞く。

『お前に欠如の意味はあるか？』

『・・・欠如？』

メス猫はなんのことだかわからないという顔をした。

わからないという顔。

『そう。欠如。』

欠如ある者、月の呪いに平伏して、脆弱無感な獣となる。  
お二方とも、欠如しているのですよ』



は。わっはっはっは。わっはっはっは。わっはっはっは。

なんだ？

なんなんだ？

J青年は驚嘆する。

驚嘆する。

J青年だけじゃない。

証言台に立たされたメス猫もこの状況に驚き、おびえていた。

そして、J青年は突然思いつく。

ここから逃げなくては。

逃げなくては。

次の瞬間、J青年はメス猫の左手をつかみ、法廷内から飛び出していた。

飛び出していた。

それに気付いた犬と猫たちは当然、それを追いかける。

追いかける。

それを振り切るようにJ青年とメス猫は逃げる。

逃  
げ  
る。

逃  
げ  
る。

逃  
げ  
る。

これ以上、ここにはいられない。

い  
ら  
れ  
な  
い  
ノ  
だ。

## 第五話

『どっどこいくのー!?!』

息を切らしながら、メス猫は聞く。

『わからない。でも、ここから逃げなきゃ!』

息を切らしながら、J青年は答える。

こたえる。

後ろからは、たくさんの追手が来ている。  
捕まったら、どうされるか分からない。

分からない。

まさか殺されないよな・・・。

J青年は必死に逃げながら、『最悪の時』を考える。

考える。

そもそも、J青年たちが法廷から逃げなかったとしても、奴らはJ青年たち、つまりクーロンをどのように扱かうのか分かったもんじゃない。

しかし、ただ、J青年の直感は確かにこう伝えている。

『あまり良い予感はない』

それは確かだった。

『ねえ、入ってきた、街の門に行っても、門番がいるんじゃない？』

メス猫は息を切らしながら言う。

『で、でも、他に、この街から、逃げる方法は、ないだろう？』

J青年も息を切らしながら言う。  
そして、考える。

どうする。

どうする。

どうする。

そして、走っているJ青年の目に、この街の門が飛び込んでくる。

囲まれている。

囲まれている。

J青年の前の門にはたくさんの犬猫たち、後ろにもたくさんの犬猫たち。

もうだめだ。

もうだめだ。

J青年はあきらめる。

あきらめる。

その瞬間、街に大きな大きな穴が開く。

穴が開く。

突然、彼らの真下にできた穴。

ブラックホールのような穴。

全てを飲み込む穴。

『夜が明けたんだー！ー！ー！ー！』

「青年たちは誰かが、そう叫ぶ声を聞きながら、奈落へ落ちていった。

落ちていった。

深く深く。

## 第六話

「青年は深い眠りから目を覚ました。

目を覚ました。

なんだこれは？

今までののは全部夢だったのだろうか？

「青年は一瞬そう思ったが、そうではないことを知る。

隣にメス猫が倒れていたからだ。

「ねえ、キミ。大丈夫？」

「青年は彼女に向かって声をかける。

しかし、反応はない。

反応はない。

彼女は死んでいた。

死んでいた。

体に異変はなかったが、なぜかJ青年はそのことを知る。

『ほーほー。』

起きたかね？』

いきなり、J青年は話しかけられた。

フクロウだ。

J青年の後ろには、彼を犬の街へと導いたフクロウがそこにいたのだ。

『ほーほー。』

貴殿は犬になった。

まぎれもなく。

ゆえに、犬の街に行かなくてはならない。

案内してやるっ』

J青年はそれに従った。

それに従った。

フクロウは再び、犬の街へとJ青年を導いた。

その間、フクロウは余計なことは一切喋らなかつた。

一切喋らなかつた。

そうして、J青年が犬の街の門をくぐるとフクロウはどこかに消えてしまった。

どこかに消えてしまった。

犬の街。

そこには、人間の姿をした犬たちがたくさんいた。

まぎれもなく、欠如した犬たちが。

おわり

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8419i/>

---

犬猫裁判

2011年10月5日23時46分発行